

## 習い事奮闘記

谷口 あさこ

今、小学二年生の息子は習い事を三つしている。バレエ(バレエボールではなく踊る方)とスイミングと公文式。習い事のスケジュールは、火曜くもん、水曜バレエ、金曜くもん、土曜バレエ、日曜スイミング。我が子ながらその過密さに少々ビビる。

朝、学校へ行き、十四時半ごろ授業を終え学童保育へ。そこで学校の宿題を済まし、おやつを食べて、遊んだら、十七時に下校してそのまま習い事の教室へ向かう。私は十八時頃仕事から帰宅すると息子を習い事の教室まで迎えに行く。十九時過ぎに夕食を食べ、その後二時間ぐらいの間にくもんの宿題をし、録画したテレビアニメを見てゲームをして、明日の用意をして、風呂に入り、ベッドで本を読み、二十二時頃就寝。まさに現代の共働き社会の洗礼を受けた慌ただしい生活である。

私が接するお母さんたちの子供も似たり

寄つたりの生活だ。英語塾とスイミングと野球を掛け持ちしている子、スイミングの後バレエに来てバレエが終わった十五分後にピアノ教室へと分刻みのスケジュールをこなしている子。子供もお母さんもフル稼働でクタクタになる。

なんでもまたこんな息苦しい状況に苛まれながらも習い事をしているのだろう。この状況の根底には、子供の希望よりも親の思惑が強く渦巻いているような気がする。改めて、息子の習い事を振り返ってみよう。

バレエは保育園の年少クラス(三歳児クラス)に進級したとき、園内で行われていた出張バレエ教室を見かけたのが始まりだ。教室のほとんどが女の子ばかりだったが、男の子も少しいた。息子は子供たちがワラワラと動いているのを見て楽しそうに思ったらしい。「やってみたい」と言い出した。月謝もそんなに高くはないし、保育園で預かっている間に先生が来てレッスンしてくれるので送り迎えの手間がない。親としては楽ちんだったの

で気軽にやらせてみた。

息子は体を動かすのが不得意なうえ振付を覚えるのも遅いので、見学している私がヤキモキしてしまう。年度末のレッスンでプチ発表会をするというので、私はますます必死になってしまった。家に帰ってから振付の練習をさせ、できていない所を繰り返しさせる。すると、親の必死さが伝わったせいかわ、息子はやる気をなくした。ありがちな逆効果だ。「もうやりたくない」と言う息子と、せっかくなやってきたのだからプチ発表会まではやらせたいという親のエゴとの戦い。だましまし続けさせた結果、プチ発表会は隣の子を見てワンテンポ遅れて踊るといふバレエには程遠い内容だった。

だが、息子は舞台で踊って皆に観てもらおうという行為が楽しかったらしく、一転「バレエを続ける」と言い出した。保育園にいる間は送り迎えもないからいいかと卒園までやらせたが、小学校に入ってもやってみるといふ。かくして保育園の時と同じバレエ教室の本部に習いに行くことになった。さあ大変

だ。何が大変かって、送り迎えもさることながら年一回の発表会が親に重くのしかかってくる。

七月末の発表会に向けて、五月後半から土日は練習で埋まる。衣装は貸し出ししてくれるのだがサイズ合わせは親がやる。息子は今年デイズニー映画のアラジンの曲に合わせて踊ったのだが、衣装はそのまんまアラビアン。裁縫は嫌いではないが、不器用なため時間がかかる。たぶん、息子の不器用さは私譲りだ。と嘆きながら、衣装を子供の体に合うよう寸詰めしていく。

まずズボンはゆったりとした白モン。風丈が長すぎるので足首のゴムを抜き、丈を十センチほど内側に折りこみ、裾にゴムを通して部分を縫って再びモンペにする。発表会后、衣装を返却するときに元に戻さないといけないので、ミシンは使えない。チクチク手縫いだ。適当に縫うと練習中の脱ぎ着で引っかけてほつれたり破れたりするので縫い目を細かくする。肩がこる。そればかりではない。最近とみに感じる老眼がここぞとばかりに出しゃばるので針に糸を通すのも大変、縫

い目を確認するのも大変。普通の眼鏡の上には拡大鏡をかけるというストロングお婆ちゃんスタイルだ。

上に着るアラビアンなシャツは女性もののテロテロ化繊のブラウスなのだが、当たり前のごとく小二の息子には大きくて、この肩幅を詰める作業は難しいぞと思った矢先、衣装部のおばあちゃん(たぶん教室の先生か元生徒のお母さんだと思う)が「袖を半袖丈ぐらいまで折りあげて縫い留めたらいいよ」と簡易な方法のアドバイスをくれて、ほっとする。ブラウスの裾はズボンに突っ込めば長さ

は分からないからOK。アラビアンなベストは踊っている最中にバサバサはだけたら動きにくいから、スナップボタンを付けてブラウスとくっつける。飾りベルトの胴回りを調整する。息子に着せてみると、ランプの精ジーンが魔法をかけたかのように小さなアラジンに変身。我ながら満足だ。

だが、これで終わりではない。発表会前々日からの終日リハーサルと本番。舞台ママさながら子供に付き添い着替えを促し、お茶を飲ませ(熱中症対策です)、お腹がすいたと

言ったらコンニャクゼリー(息子がハマっている)を食べさせ、観客席では先生に「お母さんたち携帯で撮らないで。ちゃんと目で見て」と叱られ、嵐のような二日間だった。

しかし、発表会本番で息子が自分より小さい子を引き連れて一生懸命踊っている姿に、目が潤んだ。以前は人の振りを見ていたのに今はしっかり前を見て踊っている。習い事を長く続けるとそういう成長がみられることに気がついた。なんだかんだで、バレエはできる限り続けてほしいなあと思っている。

実は、公文式も保育園の頃から続けている。小学校入学の半年前、息子の文字を書く力に不安があったので試しにさせてみた。息子はとりあえずなんでもやってみるタイプなので「すごいね」「上手だね」とおだて続けて今に至る。

くもんを続けるうえで一番大変なのは、毎日出る宿題を子供にやらせることだ。息子は三日に一回は「宿題やりたくない」とわめいてソファでゴロゴロし、取りかかってから終わるまでに二時間近くもかかる(今も算数の問題を解いているように見せかけて鉛筆で

爪を黒く塗っている。集中力が切れるとすぐこれだ」。

この宿題やりたくないタイムは、子にとっても不毛な時間であり、怒ったりなだめずかしたりする親にとっても精神的ダメージが大きい。実際、「宿題をしなさい」「嫌だ」の攻防に疲れてくもんをやめた親子を知っている。「別に秀才にならなくてもいいし」と親は言いつつも代わりに通信教育をやっているのを知っている。やっぱり親は子供にいろいろと期待してしまうのだ。

公公式は三学年上の勉強まで進むことを推奨しているが、そのレベルに到達している人は少ないだろう。息子は学校でやっている授業の半歩先ぐらいの進度だが、それで十分だ。どれだけ先に進むかよりも地道に勉強を続けてほしい。公公式に望むのはそれだけだ。

バレエと公公式は継続することに少々期待をしているが、スイミングは違う。息子の泳力が壊滅的になくて、必要に迫られての入会である。

私自身たいして泳げない。めちゃくちゃな

クロールで二十五メートルの半分ぐらいが限界だ。それでも、学校のプール授業を欠席せずにやり過ぎることができた。息子も私に似て運動音痴だけど、まあ一年生のプール授業（底にあるものを拾ったり、けのびしたり）もやり過ぎたから、二年生のプールも何とかなるだろうと思っていたのが甘かった。息子が「プールがちよっと深くて怖い」と言い出した。水深など毎年一緒だろうから、プール慣れしていないことからの心理的恐怖が原因に違いない。そう思った私は夏休みにプールに連れていき、けのびすら満足にできない状態を確認して、すぐにスイミングスクールに予約を入れた。息子はスイミングスクールに通うことにも前向きだった。とりあえず何でもやってみる性格で良かった。

習い始めてからまだ一か月、年下の子に交じって、足をバタバタしたり、体を伸ばして浮いたり、潜ったりとだいぶ水に慣れたようである。年下の子と同じことをしていることにグチも言わず、何より宿題がないのがいいのだろう。楽しそうに通っている。認定バッジをもらってクロールで泳げるようになる

ことを夢見ている息子を純粋に応援している。さっと泳げるようになってスクールを卒業してほしい。

子供の頃の習い事はいつまで続けるものなのか。私は小学生のころ習字と英語教室へ通っていたが、習字は小六で、英語は中三でやめている。小五の途中から行き始めた学習塾も中三でやめた。たぶん私も親も続けなくて十分と納得のうえ決断したのでだろう。もめたり、ごねたりした記憶は全くない。

その後、私が習い事に出会うのは社会人になってからだ。ボールペン字、通信教育の絵画、料理、パン作り、文学、通信教育の点字、中国武術、源氏物語を読む会。何かを始めては何かをやめることを繰り返し、出産を機に習い事から足を洗ってしまった。

ただ、習い事の本質は習ったことを人生の中で生かすことである。ボールペン字を習ったおかげでそれなりの字が書けるし、子供と一緒に絵を描いたりパンを作ったりと習ってきたことは何かしらの助けになっている。そして、文学学校のおかげで小説を書く仲

間と場所を得たことは、これからの私の人生にどのような影響を与えるのか。子供の習い事同様、まだまだ先が楽しみである。